様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８５２３１

研究課題名（和文）戦後日本の指導者の「ハビトゥス」形成と「界」の構造に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the Habitus of the post-war Japanese Leaders and the Structure of 'Fields'

研究代表者
稲垣　恭子（INAGAKI, Kyoko）

京都大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：４０１５９９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後日本社会で活躍してきた各界指導者のライフコース全体を通したハビトゥス形成の過程と「界」との関係やその特徴、さらに「界」相互の関係や構造について、データベースに基づく量的分析と個人のライフヒストリーを軸にした質的分析の両方から分析・考察した。その結果、家庭、学校、キャリア経験のなかで形成された文化資本、社会資本のもつ影響力が明らかになった。これらの結果をもとに、現代の指導者養成・教育の方向や展望についても議論を深めた。

研究成果の概要（英文）：This Study analysed the process of the development of 'habitus' of post-war Japanese leaders and the relationship between the habitus and their 'field', as well as the structure and relationship of each ‘field', through the statistical analysis of the data of their profiles and qualitative analysis of the life-histories. Our project illuminated the importance and the influence of the cultural and the social capital developed through the family, school, and the career experience. We also made further discussion on the prospect and the future of the leadership education.

研究分野：教育社会学

キーワード：ハビトゥス　指導者

１．研究開始当初の背景

流動化とグローバル化が進む現代社会において、新しい時代を担う指導者像や資質・能力、育成方法というテーマは、広く社会的関心を集めている現代的課題である。経済、学問、文学・芸術、スポーツなどの各領域（界）において、それぞれの領域の専門的能力だけでなくコミュニケーション能力や課題解決能力といった領域横断的な能力も含めたリーダーシップの形成は、教育の重要な課題になっている。本研究はこうした観点をふまえて、戦後日本社会で活躍してきた各界の指導者に焦点をあて、その社会的経験やハビトゥス形成の過程と「界」との関係、さらに「界」と「界」の関係まで含む重層的な構造を明らかにすることを目的として出発した。

理論的枠組に関する主な先行研究としては、ケラーのエリート研究（『現代のエリート』1967）やブルデューの一連の研究（『国家貴族』『ホモ・アカデミクス』『芸術の規則Ⅰ,Ⅱ』等）が挙げられる。日本における実証的研究としては、大学・高等教育の制度化と学歴エリートの形成に焦点をあてた研究（麻生誠、天野郁夫等）、エリート学生文化や教養に焦点をあてた研究（竹内洋、潮木守一等）、実業エリート、軍事エリート、知識人等の社会的形成に焦点をあてた研究（天野郁夫、竹内洋、広田照幸、磯辺卓三、浜口恵俊、鳥羽欽一郎、永谷健等）が挙げられる。中でも、「指導者養成」という視点から英才教育の役割に焦点をあてた麻生の研究（『日本の学歴エリート』等）は、幼児期から青年期、大学、入職後にわたる教育の過程を分析の中心に据えた数少ない先行研究である。

また、研究代表者はこれまで、戦前～戦後にかけての学生文化と教養、特に女性の教養文化の特徴について研究を進めてきた。それを土台として近年はさらに、知識人と公共圏に関する共同研究（2005～2007 年）や、戦後日本の論壇と知識人に関する共同研究（2009～2011 年）に取り組み、知識人・文化人の社会的形成の特徴を検討するとともに、女性文化人の社会的形成についての実証的研究も進めてきた。これらの研究のなかで、家庭での文化経験や感情形成、親族や知人、学校、職場等の交友関係が社会的リーダーとしての能力形成に大きく関わっていること、また社会的に評価される能力や地位形成の経路が、男性と女性ではかなり異なっていることが見出された。さらにこのような研究関心から、知識人・文化人の社会的形成にとって重要な意味をもつ「先生」の存在に着目し、学校・学校外での「先生」との関係を分析するパイロット的な研究に着手した。自伝を素材として、そのなかに登場する「先生」の思い出記述の量や人数を分析した結果、さまざまな先生の思い出を豊富に記述する「大学・研究者」タイプ、少数の先生との思い出を厚く記述する「伝統芸術家」タイプ、先生との関係にほとんど触れない「創業者型・会社経営者」タイプなどが抽出された。

本研究ではこれらの成果を発展させ、各界における指導者のハビトゥス形成の過程をより多角的な視点から分析し、戦後日本における指導者の特徴と「界」の構造を明らかにすることにした。以上が本研究を着想するに至った直接的な経緯である。

２．研究の目的

本研究は、戦後日本で活躍してきた各界の指導者に焦点をあてて、その社会的経験やハビトゥス形成の過程と「界」の関係、さらに「界」相互の関係を含む重層的な構造を明らかにすることを目的としている。本研究の特徴は、これまでの「学歴エリート」がエリート的地位の達成を到達点ととらえてきたのを、「指導者」という視点からとらえ直し、ライフコース全体にわたるハビトゥス形成過程を、文化資本、社会関係資本、感情資本の視点からトータルに分析することによって、各「界」指導者の特徴や「界」の構造を量的・質的両面から描き出そうとするところにある。具体的には「私の履歴書」（『日本経済新聞』連載、1956 年～現在）を中心に、自伝資料の収集とデータベース化を行ない、それらをもとに分析・考察することによって、現代の指導者養成・教育を考えていく上での基礎をつくると同時に、現実的な示唆を得ようとするものである。

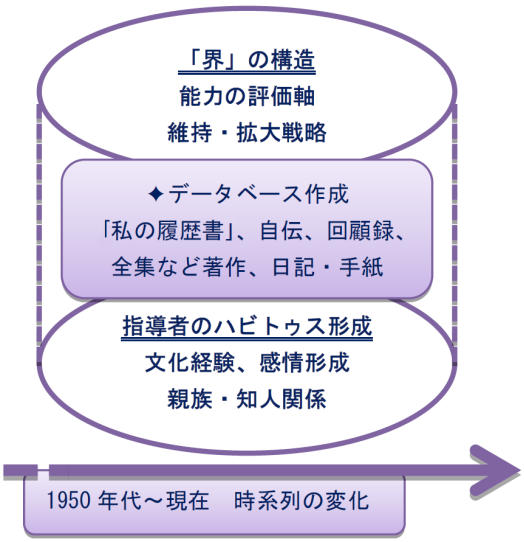
その際、学校教育だけでなく、子ども期から青年期、職業生活にわたるハビトゥス形成の過程を、文化資本、社会関係資本、感情資本の視点からトータルに分析することによって、各「界」指導者の特徴や「界」の構造を量的・質的両面から描き出したいと考えている。また、ジェンダーによるハビトゥスと「界」のポジションの違いも重要な分析軸として設定した。

３．研究の方法

各界の指導者の社会的形成過程を具体的に分析するための資料として、「私の履歴書」（1956 年より現在まで『日本経済新聞』連載）を中心に自伝資料の収集を行ない、それらをもとに各界の指導者のハビトゥス形成の過程を量的・質的の両面から分析・考察した。幼少時から成人期にわたる個人のライフヒストリーにおける経験について、文化資本、社会関係資本、感情資本を軸に詳細な分類と分析を行ない、各「界」における指導者の資質や能力の形成過程とその特徴を抽出した。それをもとに、各「界」の構造および「界」と「界」の関係といった「界」の重層的な構造について考察した。その際、男性指導者と女性指導者のハビトゥスや「界」におけるポジションの違いにも注目して分析した。

全体的な研究計画としては、3 つの柱を中心に以下のような手順で進める予定である。

(1)「私の履歴書」及び関連資料の収集とデータベース化・全体的分析
(2)各「界」の人物に関するハビトゥス形成過程の分析・考察
(3)ハビトゥスと「界」の関係、「界」の特徴と構造、「界」相互の関係と構造の分析・考察
(4)分析結果のまとめと総合的考察



(1)～(4)について、研究代表者、研究分担者、研究協力者で分担して進めた。なお、研究協力者として濱貴子、多賀太、歌川光一の 3 名を加えた。各年度での成果を次年度に公表（報告）し、最終年度にそれぞれの分析結果を相互に検討して全体の知見を総合し、戦後日本の指導者のハビトゥス形成と「界」の構造についてまとめた。平成 25 年度は、主として(1)を軸に進めた。平成 26 年度は(2)を中心的に進めた。また(1)の分析結果の報告と考察を行なった。平成 27 年度は(2)の成果報告を行なうとともに、この知見に基づいて(3)を実施した。平成 28 年度は(3)(4)の報告を経て全体を総括し、出版の準備をしている。

４．研究成果

本研究では、戦後日本社会で活躍してきた各界指導者のライフコース全体を通したハビトゥス形成の過程と「界」との関係やその特徴、さらに「界」相互の関係や構造について、データベースに基づく量的分析と個人のライフヒストリーを軸にした質的分析の両方から分析・考察した。その結果、家庭、学校、キャリア経験のなかで形成された文化資本、社会資本のもつ影響力が明らかになった。これらの結果をもとに、現代の指導者養成・教育の方向や展望についても議論を深めた。

以上の分析・考察から得られた主な成果は以下のようにまとめられる。

(1) 戦後日本の各界リーダーのデータベース作成

「私の履歴書」を基に、各個人のプロフィール（属性）、幼少時から成人期における文化的経験（読書、習い事、趣味、成績など）、感情的な経験（劣等感、競争心、嫉妬など）、家庭・学校・職業生活における関係（親、親族、教師、同級生、上司、同僚など）についてデータベースを作成した。

(2) データベース及び自伝・評伝等を基に分析を行った結果、全体的な傾向・特徴として以下のような結果が得られた。

① 各界リーダーのハビトゥス形成にとって、家庭（主に父親、母親との関係）、学校（教師、友人との関係）、最終段階の学校経験（とくに高等教育卒）、キャリアにおける社会関係（上司、同輩）、キャリア上の転機（昇進、退社等）が重要な影響力をもつこと。
② 界の性質によって、共通のハビトゥスとして認識される特徴に一定の傾向やタイプがあること。
③ ハビトゥス形成の過程、界のなかでのポジション、あるいは界自体の構成がジェンダーによって大きく異なること。

(3) 研究分担者・研究協力者による成果

① 学校時代の師弟関係を軸に各界指導者のハビトゥスと界の特徴を分析した結果、学問界、財界（大企業経営者）、官僚の世界においては、大学時代の師弟関係および友人関係が大きな位置と意味を占めている一方、伝統芸術・芸能や創業者タイプの企業経営者においては文化資本よりも実力や独創性が強調される傾向があること等が導き出された。（担当：稲垣恭子、濱貴子）
② ハビトゥス形成のもとになるのは、家族（出身階級）と並んで学歴である。そこで、戦後日本の指導者の学歴に着目して量的データを分析した。1978 年の上場会社社長でみると、20%が東大で、京大 8%、その他の旧帝大 8%、一橋大学 6%。実に 42%がこれらの大学で占められていた。役員についても 38%がこれら特定大学出身者だった。しかし、2007 年の上場企業調査では、社長で多いのが慶應義塾大学を筆頭に以下早稲田大学、東京大学、中央大学、京都大学と続く。日本大学、明治大学、同志社大学、関西学院大学が 10 位以内に入っている。主に有名私大だが、かつてのように東大や京大を中心とした覇権構造ではない。旧制高校世代が指導者から退くあたりから、学歴をつうじての界内部、界間の指導者の間にハビトゥスの共同性があった時代が終わり、界内部、界間の指導者の間にハビトゥスの疎隔と乖離の時代がはじまったという仮説が立てられた。この仮説のさらなる

検証とこの仮説に基づく指導者層の凝集性について引き続き検討していきたい。（担当：竹内洋）

③ 戦後女性指導者とくに女性文学者（野上彌栄子、村岡花子、石井桃子）についてみると、共通して高学歴であり、文学界に参入する際に語学力が有効であったこと、児童文学界が女性文学者と親和的であったことが示唆された。（担当：目黒強）

④ 女性婦人運動家（奥むめお、丸山秀子）について分析し、ハビトゥス形成における共通点や関係性、運動の組織化戦略や実践、婦人運動界におけるポジションの違いについて分析・考察した。（担当：濱貴子）

⑤ 幼児教育界における教諭・教育者の構成やその変化について分析した結果、女性・外国人宣教師から男性・日本人の手に移っていった。（担当：高山育子）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６４件）

(1) 竹内洋、日本型選抜の狡知と帰趨　『日本のメリトクラシー』増補版刊行にあたって、UP、査読無、3 月号、2017、1－5
(2) 目黒強、大町桂月の修養主義的文学観、大阪国際児童文学振興財団研究紀要、査読無、第 30 号、2017、1－14
(3) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 34 回　私淑的読書、内外教育、査読無、第 6524 号、2016、9－11
(4) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 33 回　野上彌生子と夏目漱石、内外教育、査読無、第 6520 号、2016、10－11
(5) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 32 回　正宗白鳥と内村鑑三、内外教育、査読無、第 6516 号、2016、6－7
(6) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 31 回　小島政二郎と永井荷風、内外教育、査読無、第 6512 号、2016、7－9
(7) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 30 回　「私淑」の文化、内外教育、査読無、第 6507 号、2016、8－9
(8) 竹内洋、「教育改革」はなぜいつも失敗するのか、新潮 45、査読無、6 月号、2016、19－24
(9) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 21 回　師弟関係はパンのためだけか？、内外教育、査読無、第 6468 号、2016、11－13
(10) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 25 回　ライバルとしての師弟関係、内外教育、査読無、第 6486 号、2016、12－14
(11) 竹内洋、「反」知性主義と「半」知性主義、改革者、査読無、1 月号、2016、46－49
(12) 竹内洋、日本を覆う「地位不安」という病、新潮 45、査読無、1 月号、2016、64－67
(13) 竹内洋、一“省”功成りて万骨枯れり、中央公論、査読無、2 月号、2016、30－33
(14) 竹内洋、解毒剤なき「偽善教養社会」、新潮 45、査読無、2 月号、2016、26－29
(15) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 15 回　財界エリートの師弟関係（1）東大出身者の場合、内外教育、査読無、第 6444 号、2015、10－12
(16) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 12 回　「芸術・芸能界」における師弟関係、内外教育、査読無、第 6431 号、2015、8－10
(17) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　15、ちくま、査読無、12 月号、2015、38－43
(18) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　14、ちくま、査読無、11 月号、2015、38－43
(19) 竹内洋、反知性主義的空気と大学改革、IDE　現代の高等教育、査読無、11 月号、2015、38－42
(20) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　13、ちくま、査読無、10 月号、2015、38－43
(21) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　11、ちくま、査読無、8 月号、2015、40－45
(22) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　10、ちくま、査読無、7 月号、2015、42－47
(23) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　9、ちくま、査読無、6 月号、2015、36－42
(24) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　8、ちくま、査読無、5 月号、2015、30－35
(25) 目黒強、明治期における＜冒険小説＞の排除と包摂―教育雑誌を中心に、大阪国際児童文学振興財団研究紀要、査読有、29 号、2015、1－11
(26) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 5 回　古典芸能の世界―伝統的な師弟関係、内外教育、査読無、第 6401 号、2015、12－13
(27) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 4 回　疑似師弟関係、内外教育、査読無、第 6397 号、2015、8－9
(28) 稲垣恭子、「師弟関係」の社会史　第 2 回　「師」との出会い、内外教育、査読無、第 6390 号、2015、12－13
(29) 竹内洋、「フロー情報」の氾濫に抗して、新潮 45、査読無、2 月号、2015、54－57
(30) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　7、ちくま、査読無、4 月号、2015、32－37
(31) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　6、ちくま、査読無、3 月号、2015、30－35
(32) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　5、ちくま、査読無、2 月号、2015、30－35

(33) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　4、ちくま、査読無、1 月号、2015、30－35
(34) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　3、ちくま、査読無、12 月号、2014、18－23
(35) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　2、ちくま、査読無、11 月号、2014、14－19
(36) 竹内洋、教養派知識人の運命　阿部次郎とその時代　1、ちくま、査読無、10 月号、2014、18－23
(37) 竹内洋、進歩的文化人、岩波、そして朝日の凋落、中央公論、査読無、11 月号、2014、42－49
(38) 竹内洋、大学教授の下流化、中央公論、査読無、8 月号、2014、38－45
(39) 目黒強、明治後期における課外読み物観の形成過程―『太陽』における「小説」観に着目して、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、査読無、8 巻 1 号、2014、21－31
(40) 稲垣恭子、お稽古からたしなみへ―女学生文化の系譜、子ども学（甲南女子大学国際子ども学研究センター）、査読無、第 16 号、2014、109－132
(41) 目黒強、教育雑誌における教育的メディアとしての児童文学の発見―『教育時論』を事例として、児童文学研究（日本児童文学学会）、査読有、46 号、2014、1－14
(42) 稲垣恭子、階級のみえる社会とみえない社会、内外教育、査読無、第 6268 巻、2013、1－1
(43) 稲垣恭子、明治のハンサムウーマン、内外教育、査読無、第 6261 巻、2013、1－1
(44) 稲垣恭子、師弟関係もバーチャルに、内外教育、査読無、第 6238 巻、2013、1－1
(45) 竹内洋、佐渡島の二人の政治家と敗戦後日本―有田八郎と北吟吉、吉野作造研究、査読無、第 9 号、2013、39－50
(46) 竹内洋、「平成の高等遊民」問題をめぐって、こころ（平凡社）、査読無、16 巻、2013、31－33
(47) 竹内洋、「教養主義」が死滅した後に、新潮 45、査読無、12 月号、2013、35－38
(48) 竹内洋、日本型ノブレス・オブリージュの真髄を、WiLL、査読無、9 月号、2013、46－49
(49) 竹内洋、歴史にみる大学バブル、人文研ブックレット（同志社大学人文研究所）、査読無、46 号、2013、3－22
(50) 竹内洋、“革新”の輝きと凋落、そして反転、中央公論、査読無、5 月号、2013、68－73
(51) 竹内洋、『中村真一郎青春日記』と旧制高校（パネルデスカッション）、中村真一郎手帖、査読無、8 号、2013、5－50

〔学会発表〕（計１２件）
(1) 高山育子、明治期から昭和戦後期にかけてのキリスト教系幼稚園保育者の社会的ポジション、第 89 回日本社会学会ポスター発表、2016 年 10 月 9 日、九州大学伊都キャンパス（福岡県福岡市）
(2) 稲垣恭子、男女別学の時代と女学校文化、京都市学校歴史博物館「男女共学化の時代―戦後京都の公立校・男子校・女子校」（企画展）講演会、2016 年 9 月 4 日、京都市学校歴史博物館（京都府京都市）
(3) 稲垣恭子、テレビドラマの世界はこうして創られる、第 106 回「子ども学」講演会（パネリスト）、2016 年 6 月 9 日、甲南女子大学国際子ども研究センター（兵庫県神戸市）
(4) 稲垣恭子、「学び」の氾濫を考える、福岡県高等学校教育研究会　平成 27 年度春季講演会、2015 年 5 月 16 日、福岡リーセントホテル（福岡県福岡市）
(5) 細辻恵子、現象学的社会学から考える「子ども言説」と児童文学、日本子ども社会学会大会（第 21 回）、2014 年 6 月 28 日～2014 年 6 月 29 日、敬愛大学　稲毛キャンパス（千葉県千葉市）
(6) 稲垣恭子、教育社会学を学んだ人のための教育社会学再考、日本教育社会学会　第 2 回若手研究者セミナー、2014 年 3 月 16 日、関西大学（大阪府吹田市）
(7) 高山育子、「女性文化人」の系譜１―『現代出版文化人総覧』にみる戦後初期の女性文化人、第 86 回日本社会学会大会、2013 年 10 月 12 日～2013 年 10 月 13 日、慶応義塾大学（東京都港区）

〔図書〕（計１５件）
(1) 稲垣恭子、教育文化の社会学、2017、220
(2) アキ・ロバーツ・竹内洋、アメリカの大学の裏側（竹内洋「第 6 章　アメリカを「鏡」に日本の大学を考える」）、2017、275（228－271）
(3) 竹内洋、日本のメリトクラシー　構造と心性（増補版）、2016、325
(4) 竹内洋、立志・苦学・出世、2015、205
(5) 竹内洋、革新幻想の戦後史　上、2015、396
(6) 竹内洋、革新幻想の戦後史　下、2015、377
(7) 町村敬志・荻野昌弘・藤村正之・稲垣恭子・好井裕明編、現代の差別と排除をみる視点（差別と排除の［いま］①）（稲垣恭子「第 4 章　ピュアという鏡」）、2015、192（101－135）
(8) 斉藤利彦編、学校文化の史的探究（稲垣恭子「自伝にみる師弟関係―『私の履歴書』の分析から」）、2015、400（207－231）
(9) 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編、日本の論壇雑誌―教養メディアの盛衰（竹内洋「序論」、竹内洋「中央公論　誌運の法則」、稲垣恭子「第 4 章　『婦人公論』―お茶の間論壇の誕生」）、2014、352（1－13、19－47、111－131）
(10) 松本彩子編、戦争の教室（竹内洋「「戦

争未亡人」とその子どもたち」)、2014、496（62－64）
(11) 竹内洋、大衆の幻像、2014、332
(12) 藤原書店編集部編、内田義彦の世界 1913-1989　生命・芸術そして学問（竹内洋「ある思い出」)、2014、332（68－70）
(13) 杉原志啓・富岡幸一郎編、稀代のジャーナリスト　徳富蘇峰（竹内洋「正力松太郎と蘇峰」)、2013、324（286－289）
(14) 村上一郎著・竹内洋解説、岩波茂雄と出版文化（竹内洋「はじめに　村上一郎と『岩波茂雄』」、竹内洋「解説　教養主義の時代」)、2013、164（3－23、125－164）

６．研究組織

(1)研究代表者

稲垣 恭子（INAGAKI, Kyoko）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：４０１５９９３４

(2)研究分担者

竹内 洋（TAKEUCHI, Yoh）
関西大学・アジア文化研究センター・客員研究員
研究者番号：７００６７６７７

細辻 恵子（HOSOTSUJI, Keiko）
甲南女子大学・人間科学部・教授
研究者番号：９０１９９５０５

目黒 強（MEGURO, Tsuyoshi）
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：７０３４６２２９

高山 育子（TAKAYAMA, Ikuko）
頌栄短期大学・保育科・准教授
研究者番号：１０２５４５６７

(3)連携研究者

(4)研究協力者

濱 貴子（HAMA, Takako）
富山県立大学・工学部・講師
研究者番号：１０７１１６１６

多賀 太（TAGA, Futoshi）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：７０２８４４６１

歌川 光一（UTAGAWA, Koichi）
名古屋女子大学・文学部・講師
研究者番号：５０７０８９９８